

☆年間第26主日(10月1日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (エゼキエルの預言 18章 25-28節)

主は言われる。「お前たちは、『主の道は正しくない』と言う。聞け、イスラエルの家よ。わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。しかし、悪人が自分を行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。」

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 2章 1-11節)

皆さん、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、"霊"による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 21章 28-32節)

そのとき、イエスは言われた。「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

記録的な暑さの夏でしたね。この暑さの中 10月を迎えています。金木犀の花の香りが漂う季節ですが、今年はどうでしょうか。この10月はロザリオ月と言われています。日々の祈りの中でこのロザリオの祈りをぜひ唱えましょう。ロザリオとはバラの花の冠です。私たちの祈りのバラの花をマリア様に捧げ、私たちがイエスさまの教えを毎日実行できるように取り次いでいただきましょう。今日10月1日は平日であれば「幼いイエスの聖テレジア」の記念日です。日本において絶対的に人気のある聖女です。観想修道会のシスターですがとても活動的なシスターだったようで、できれば宣教地に行って活動したいと考えておられたようです。その情熱的な心を見習いたいと思います。

第一朗読 (エゼキエルの預言 18章 25-28節)

ここでは人間の思いと主である神の思いが違うのだと書かれています。「主の道は正しくない」という人間に対し主である神は本当にそうかと問いただされます。そこには善人が苦しみ悪人がはびこるのをなぜなのか、悪人が富み栄えているように見える世界に対しなぜ神は黙っておられるのか

という、一見まともに思える考えに対し神は言われます。「わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、私は悪人の回心を喜ぶ」と。悪人の栄に対し妬みを持つ一見善人に対して神は厳しくされるのです。「あなたは本当に神のみ前で善人なのか」と。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 2章 1-11節）

現代の自己アピールを奨める時代にあって、その真逆を生きる必要をパウロは説いています。自分の能力を誇示し主張する現代は表層的な生き方です。それらは神からの賜物、与えられたものです。主に感謝し、自らはへりくだるのが筋なのです。パウロはここで初代教会のキリスト賛歌をフィリピの人々に語ります。この賛歌はもうすでに教会のなかでとなえられていたようです。パウロはキリストが天に昇られてまだ数年しかたっていない時代の人物ですが、この手紙を書いた頃でも 100 年もたっていないのですから、当時の教会の信仰は素晴らしく発展していたのですね。現代の私たちも 2000 年たっても当時の信仰を受け継いでいることを誇りに思いましょう。

福音朗読（マタイによる福音書 21章 28-32節）

「後のものが先になり先のが後になる」というイエスの言葉です。この言葉は当時の支配階級の人々に対して言われています。現代で言えば教会の主だった階級の人々、小教区教会の指導的立場にいる人々に向けられています。その立場にいるだけで神のみ心になかったと思っはならないということです。立場はたちまち逆転するのです。まるでオセロゲームのようです。大事な今は今の自分を考え直すということです。生きている限り神に立ち返る時間は十分にあり、漫然と慢心している人には時間は無いということです。罪の大きさではなく、神に立ち返る心が本物かが問われているのです。私は今どこにいますか。



「うーむ、私は何者か？」 礪山美術館(安曇野)2023年9月

P.S.

バザーの準備のために教会に出入りが活発になっています。とても素敵なことだと思います。心を開き、倉庫を開き、押入れを開いて大切な物でも思い切って神に捧げましょう。神さまはその心意気にきっと応えてくださいます。

**カトリック足立教会
主任司祭 野口重光**